

誰にもみとられずに亡くなる「孤独死」への関心が高まる中、部屋に残された遺品を遺族に代わって片づける遺品整理業者が増えている。国民4人に1人が65歳以上とされ、体力的に部屋を片づけきれない遺族から依頼が相次いでいるためだ。暮らしぶりの一端をうかがえる遺品。業者が見た「最期」の現場を追ってみた。

(札幌報道・広瀬誠、小池武士)



\* 元妻との写真数百枚

札幌市の道管住宅に記者(広瀬)が足を運んだのは4月上旬だった。この1週間前、この部屋に住んでいた一人暮らしのお年寄りが病院で亡くなった。

道央で暮らす娘から「一人手が足りず、処分方法も分からない」と遺品整理の依頼を受けたのは、札幌市清田区のアクアブル1。記者は従業員4人と1LDKの部屋に入った。

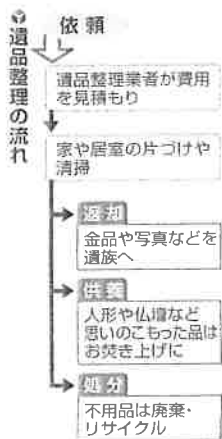
台所は調理器具がきれいにそろい、窓際には植木鉢が整然と置かれている。傍らで、従業員が袋に日用品を次々と入れていく。3時間後、作業は終わった。アクアブル1代表の二口英樹

## 細る絆 業者が遺品整理

### 孤独死、自殺……垣間見る人生



道管住宅で遺品整理をする二口さん(札幌市で)



さん(47)は「遺品からはなくなった人の暮らしぶりが見えてくるんです」と言った。

二口さんは、かつて葬儀会社に勤めていた。自殺や孤独死に伴う遺品整理を頼まれることが多くなり、アクアブルを2009年11月に設立した。当初1か月に1〜2件だった依頼は年間約100件に増えた。

場には胸が痛むという。札幌市の一戸建てに一人で暮らす高齢の男性が自殺し、半年後に見つかった。疎遠だった依頼主の長男から「全部捨てて」と言われたが、書斎の机には離婚した妻と納まった写真が数百枚もあり、炊飯器の中には「今までおいしいご飯ありがとごさいました」と丁寧で書かれたメモが入っていた。

5日間に及んだ作業で、ゴミはトラック10台分にも及んだ。後日、長男から来たメールには

「母も喜んでいきます。ありがとうございました」と感謝の言葉がつづられ、依頼人のために、その心残りも片付けた」との思いがこみ上げてきたという。

\* 請求トラブルも

遺品整理はかつて、遺族が形見分けを行う別れの儀式でもあった。しかし、遺族の高齢化や家族関係の疎遠化で体力的な負担が重い遺品整理を代行するニーズが高まり、引越し業や使利屋が遺品整理業界に次々と参

### 増す需要「道内に300社」

この業界は歴史的に新しく、仕事をやるにあたって免許や資格も必要としない。このため、業者数などのデータもはっきりせず、千歳市の社団法人・遺品整理士認定協会は「全国で約5000社あるのではないかと推測する」。

道内には約300社があるとされ、札幌市のある業者は「北海道は広く、何かあった時に近くに家族がないケースが多いのではないかと話し、他の都府県より遺品整理のニーズが高いとみている」。

業者が増える一方で、道外では見積もりを大きく上回って遺族に請求されたトラブルも確認されている。

国民生活センター(東京)によると、昨年7月に関東地方の50歳代の女性が見積もりを約30万円上回る約110万円を請求された。同10月にも東海地方の50歳代の女性が見積もりより約50万円高い約130万円を要求されたという。

**遺品整理業** 一人暮らしの高齢者らの死後、遺族からの依頼を受けて故人の方の財を整理し、遺品を遺族へ返して不用品を処分する職業。仕事に必要な資格はないが、千歳市の遺品整理士認定協会が民間資格「遺品整理士」を設けている。